ある保姆さんとの話

T　K

「先生、昨日著いた『幼兒の教育』の五月號の倉橋先生の巻頭の言に「**教育される教育者**」と題して書かれてありましたね。私は去年の暮頃から新しく心に芽生えて來てその後生長しつゝある自分の心境が本文によつて認められ、いたはり育てられてゐる樣に思ふ。」

「私は自分を教育してゐる。自分で自分を教育し得る者のみが、幼兒から教育され得るのだと思ふ。」

「幼兒を友として有し得る我々は自分を教育する上に大きな味方を有してゐるのではないか。教育されるといふと稍〻智的にひゞくかも知れぬが、倉橋先生があの文で云はれた**受くる**といふ氣持に至つては、幼兒は實に無限の泉である。純眞な幼兒の自然の性情が我々に觸れて來る時、我我は常に幼兒から受けてゐる。自分に大した力も無いのに丁度幼兒から心の光を受け得る樣な地位に居る我が身の惠福を私はしみ〴〵と感じる。潑溂と活動する幼兒、靜かに遊びに沒頭する幼兒をじつと見てゐると、この幼兒達のおかげで自分が今日あるを得てゐるのだといふ何とも云へない感じが胸にこみあげて來る」。

*

「倉橋先生が『いろ〳〵の子供』と題して雜誌に書いてゐられる講話は、私がこの子供達について心して來たことにピッタリ合つてその指導をして頂いてゐる樣な氣がして有難く思ひます。あそこに書かれてゐる子供は保姆の特に心を用ひねばならぬ惱みの種とも云ふべき子なのですから、そういふ子供について心づかひの指針が與へられる事は實に必要な大切な事だと思ひます。現にこの子でもあの子でも普通の子と同じ樣な態度で接してゐるだけで特にその子に心を用ひて特別な工夫、努力をしなければ幼稚園へ來な

くなる子なのです。つまり、みんなこの社會生活に入れない、だから面白くなくなつて止めてしまふのです。幼稚園によると、滿員後に入園申込に行くと「やがて誰かゞ止めれば入れてあげませう」と云はれる所がある。そんな所ではこういふ風な子供達は皆落伍してしまふのです。そして新しい子が途中から入つて來る。

「一通りの事をやつてゐて退園する子は、向ふが惡いと思はぬまでも、止むを得ないとして捨てゝおくのでせうか。つまり相對責任なので、一旦自分の組に入つた以上は**わが子**としてどこまでもその子の缺點を負ふて保育してゆかうといふ絶對責任を痛感してゐないのですね」。(五月十九日)

＊

「私達同期の卒業生が恩師を中心に先日懇親會を開きました。その時みんなが私に云ふのですよ。

『どうもあなただけは、他の者と變つてゐる。どこかと云へば、あなたは普通の家庭で子供の世話をしてゐるお母さんと感ぜられ、他の者の樣に先生らしくない。つまり普通の女の人といふ感じなのですね……』。

と。例へば、丁度その時船遊をしたので、河原を歩く爲履物がぬれるから他の者はみんな宿の下駄をはいてゐたのに、一人の恩師だけは御自分の草履をはいてゐられる。中にはそれに氣づいてゐる者もあつたが、『先生あんなのをはいてられる』と自分達の間で云ふのみで先生に申上げやうとする者はない。その時私は何げなく先生に宿の下駄を持つて行つて『先生これとおはきかへなさい』とお渡した。するとみんなは『あなたの樣にすぐに出來ない』。といふのです。こうして後から思ひ出して云ふと何だか先生の爲わざとした樣にきこえるかも知れぬが、その時私は何の氣なしにたゞそうしただけなのです。萬事この調子……云々」。

(五月二十二日)

＊　＊　＊

＊　＊　＊